夢現

梔子朱子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢現

【Ｎコード】
Ｎ９０４５Ｅ

【作者名】
梔子朱子

【あらすじ】
五十嵐家の長男である紫（ゆかり）は毎夜、不思議な夢を見ていた。深い深い闇にいる自分―。そんなある日、いつもとは少し違う内容のものを見た。それは夢の世界であり、現の世界でもあったのだ。

プロローグ

ボクは最近、不思議な夢を
同じような夢を見る

真っ暗な空間の中で
ポツンと佇(たたず)んでいるだけ

そして今日もまた、その夢を見る

でもソレは夢の続き

暗闇の先だったんだ―

第一話

ここは、何処(どこ)だろう。

今日も、何時(いつ)ものように黒一色の世界にいるはず。

気付くと、ボクは別の場所にいた。

幾つもの曲がり角が途中にある、狭い狭い廊下。

灯りといえば、炎の揺れるぼんやりとした明るさだけだった。

立ち止まっていてもどうにもならない事を知って、取り敢えず真っ直ぐ進むことにした。

歩いて　歩いて　歩いて

何処までも、どんなに歩いても、全てが同じように見えた。

ひたすら歩いていると、やっと開けた所に辿り着いた。

「広間・・・？」

一瞬、遠い国の城に迷い込んだのかと思った。

大きなシャンデリアに、螺旋(らせん)階段。

部屋を見渡していると、人影が見えた。
いや、それは大きな女の人の肖像画だった。
「誰だろう？」
この家の人なのは確かなんだろう。
そういえば、ボクはこの人の事、知っている気がする。
「綺子（あやこ）様！！」
「えっ？」
行き成り、使用人らしき人が現れて、ボクの腕を掴んでいた。
まぁ、夢の中でならよくある話。
「綺子様、早くお逃げっ！？」
必死になってボクに呼びかけている。
その途中で、その人は崩れ落ちてしまった。

足元には、首が――

何か訴えるかのように、ボクの顔を見ている。

キモチワルイ、ただそう思った。

他には何も感じなかった。

ボクは彼女の死よりも、この夢があまりにも現実的なの事に驚いた。

血の独特な鉄っぽい臭い。

足にかかる、生暖かく赤い液体。

「クス。夢の世界へようこそ。綺子様」

また人が現れてきて、この人までボクの事を綺子と呼ぶ。

「ボクは綺子様なんかじゃない」

「そうですね・・・・そんなの当たり前ですよね」

黒いローブに体を包み、大きな鎌を持っていた。

声質からして、男。
年は・・・若いと思う。

「あんた誰？」

「そうですね・・・死神（しにがみ）、とでも言っておきましょうか」

「何であの人を、その、殺したわけ？」

「この世界には必要のないモノだったからですよ」

「そんなのおかしい」

「けれど、これはあなたの世界ですから。
ホラ、現にあの方の躰（カラダ）はもう無くなってしまっているではないですか」

本当に跡形も無く、残ったのは埃（ほこり）の被った床だけだ。
相変わらず壁にかかった絵だけが綺麗に目立つ。

「気になりますか？」

「誰、あれ」

「クス。秘密ですよ。すぐに分かったら面白くないでしょう？まぁ、

そのうち・・・・」

「意味わかんない」

死神がニヤリと笑った。

「それじゃあ、そろそろお別れです」

「えっ？ちょっ」

「また、夢の世界で会いましょう」

■　■　■

ジリジリと鳴る目覚まし時計の音が、頭に響いてくる。

「変な夢・・・・」

自然と口から出てきた。

妙に躰が汗ばんで、気持ち悪い。

いったい、あの死神と名乗った男は・・・

「紫(ゆかり)様」

「わかってますよ」

息が詰りそうになる。

無駄に大きな檻(オリ)の中。

ボクは何時までこうしているつもりなのだろう。

今日は、あの人もこの中にいるのだろうか。

「紫様、御食事の準備が整いました」

「はいはい」

素早く制服に着替え、食堂へと向かう。

食堂に入ると、そこには祖父の姿があった。

「・・・・おはよう御座います」

ボクの祖父、ボクの主(あるじ)。

普段は仕事やらなんやらで、あまり家にいない。

「何だ、その頭は？」

「普通だと思いますが？」

忌々しそうに祖父はボクの無造作に伸びた髪を見る。

「五十嵐(いがらし)の長男として恥かしいと思わないのか？」

「いいえ。特には」

「話にならん」

「そう、ですか・・・そういえば、此方(こちら)に見えるのは珍しいですね」

「あぁ。だが無駄な時間を過ごしてしまったようだ」

そう言って、出て行った。相変わらず嫌な人だ。

孫息子に会ったというのに・・・

どんどんボクを切り裂いていく。

悲しい、ただ単純にそう感じたのだろう―

第二話

「紫」
「うん？」
「どうした？お前、顔色悪いぞ」
「あぁ・・・大丈夫。きっと今朝、変な夢たせい」
「あの真っ暗な、ってやつか？」
「そうなんだけど・・・・その続きみたいな？」
ボクが安心して気を許せる唯一の人。
それが彼、三上浩太。
何故かはわからないが、一緒にいると気が楽になる。
夢の話を一通り話すと、吹き出しながら笑われた。
「大丈夫だよ。んなの、夢なんだからさ」
「いや、別にそういうわけじゃ・・・」
「そうかそうか」
そう言うと、これ以上突っ込んでくる事は無かった。
周りから見たら少し冷めた関係に見えるかもしれない。
けれど、ボクには丁度好い関係なんだ。
「紫」
「うん？」
「俺がお前の力になってやるからな」
「・・・・ありがと」
きっと、ボクが祖父に会った事に気が付いたのだろう。彼に言わせると、ボクはわかり易いらしい。
何時もボクに何かあったら傍にいてくれる。
それから暫く、ただ黙ってボクの傍にいてくれて、ボクを安心させてくれた。
「さて、そろそろ昼終わるぞ」
「あぁ」

「次なんだっけ？」
「えっと・・・・現国」
時間割を思い出し、教えると、浩太はとても嫌そうな顔をした。
「嫌ならサボる？」
「いや。俺がサボったらお前も来るんだろ？」
「まぁね」
「ったく・・・・」
悪い奴め、と浩太がつぶやく。
「お互い様」
本当に不思議。
さっきで頭の中がモヤモヤして気持ち悪かったのに。
気分が楽になった。
浩太といると、よくこうなる。
人の話を聞くのが上手いんだろうな。

「綺子様、ドレスがとてもお似合いですよ」
「本当？えへへ、嬉しい」
小さな女の子が可愛らしいドレスを身にまとい
ふわふわとさせながら、はしゃぎ、笑っていた
それに釣られて、周りの人間も笑う
＆ａｍｐ；＃９７７０；

「五十嵐」
「んっ・・・・・」
記憶が・・・飛んでいる？
もしかして、寝ていた？

「どうした、珍しいな？」
現国の教員が心配そうにボクを見ていた。
「大丈夫です。すいません・・・」
「そうか？じゃあ・・・授業再開するぞ」
本当にどうしたのだろうか。
最近、ストレスってヤツに躰が負け気味になっていた。
何がいけなかったのか・・・
つくづくこの躰が不便に思えた。
今日一日を過ごして感じた。
最悪だったという感情。
けれど、ベッドに潜り込めばすぐに睡魔が襲ってきて、ボクを眠りに付かせた。
眠りに付くまでは良かったが、今日もアイツがいた。

第三話

「こんばんは」
「死神」
「驚きました？」
「いや。来ると思ってた。中途半端に消えたから」
黒いフードが邪魔で、死神の表情は読み取れない。
しいて言うなら。左右に引き上げられた口がチラチラと見えるくらい。
「賢いお方だ。けど、やっぱり綺子様とは違う・・・」
「綺子様って、あの？」
壁にかけられた絵を見ながら、ある事に気付いた。
「えぇ、綺麗なお方でしょう？」
「あぁ、でも・・・・」
「お母様に似ていらっしゃる」
思った事を意図も簡単に言われたものだから、ドキリとした。
「あの方はあなたのお母様のお母様。つまり、あなたのお祖母様ですよ」
「ボクの・・・・お祖母様？」
ボクの母は、もうずいぶんと昔に逝なくなった。
そのせいか、祖母の存在なんて思いもしなかった。
「確か・・・十六の時にあの世に旅立たれました」
「十六？ボクと同じ年じゃないか」
「そうです。一番華やかで美しかった・・・・」
死神の表情がフッと柔らかくなった。
けれど、何処か哀しげで、ボクまで少し苦しくなった。
もう一度、祖母を見る。
「ねぇ、死神。祖母の事を教えてくれないか？」
「そうですね・・・・一言でいえば、華やかな方でしたね。そして、

とても愛らしく、誰からも愛されていた」
「へぇ、それはボクとは大違いだ」
「そんな事は無いですよ。あなたも十分愛されているではないですか」
「どうだか。それより、死神。あんたも祖母の事を愛していたって事？」
「さぁ、どうでしょう？まぁ、あなたと同じような感情はありましたね」
「ボクと？」
「えぇ。それはココにあります」
死神はそう言って、ボクの胸を指した。
「ボクの、胸？」
「と言うよりも、ココロですかね？あなたと同じ感情」
「同じ・・・・」
「私、あの男を憎んでおります」
「・・・・・・・・祖父を？」
「えぇ」
一瞬だけ、ほんの一瞬だけ、ボクを包んでいた空気が冷たくなった気がした。
夢なのに、現実と同じ感覚だった。
人間の、冷たさ――
こいつがもしも、本当に主を憎んでいるというなら、こいつはボク自身である気がした。
夢だからこそ奏でられる創造の世界・・・・
「紫様」
「様って付けんな」
「わかりました、あなたがそう望むなら」
そう言うと、いきなり鎌を構えた。
何事かと思った。
「大丈夫ですよ。どうやら、また招かざる方きただけですから」

「ちょっと、またあの人みたいに・・・」
「そうなりますね・・・そんな嫌そうな顔をしないでください」
別に怖いとかじゃない。
ただ、こいつのやり方が理解できなかっただけ。
此処にきた、他の人間を消す必要はないと思うから。
死神はボクに近づいて、そっと頬に指を置いてきた。
それは生きている人間からは想像が付かないほどの冷さだった。
そう、まるで氷のように。
「本当にあなたは綺子様に似ていらっしゃる・・・」
どうして、オトコであるボクがあの人に似ていると言うのだろうか。
ボクは男なんだ、あんな綺麗な女性(ヒト)と似ている筈がない。
そして、誰からも愛されたという彼女のようにまっすぐな人間ではない。
「安心して下さい。消すのはこの世界でだけですから」
「それでも」
「さあ、そろそろ起きる時間ですよ」
ニコリと笑った気がした。
優しい笑顔だった。
ふと、浩太の事が頭を過ぎった。
・・・・・いけない、彼に心を許しては。
絶対に、駄目なんだ。
彼に心を許してしまったら・・・
きっとボクは壊れてしまうだろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9045e/

夢現

2010年12月17日14時27分発行